

ワイズのユース事業事始め  
ワイズにはユース事業が似合う  
ユース事業の新たな展開  
ユース事業事始め  
ワイズメン途上の死

2011年2月15日 東日本区1998~2011 ヒストリアン 吉田 明弘

ワイズには、ユース事業が似合う

国際協会は、『Historical Events』という、12頁ほどの年表を発行しています。

このブックレットによると、1922年に創立したワイズメンズクラブ国際協会が最初に行った事業は、1923年のジュニアワイズメンズクラブの設立だとしています。カナダ・ノバスコシア州のシドニークラブが作ったユースクラブです。このことは、YMCAのサポートクラブとして誕生したワイズメンズクラブとしては、至極、もっともなことといえます。

1924年には\*世界展望(World Outlook:WOL)事業の委員が指名されています。1929年には少年事業(Boy's Work)など3委員会が設置され、1935年には青年事業(Young Men's Work)、少年事業の国際事業主任が指名されています。

個々のクラブが開発した事業を国際協会として取り上げ、委員会を設け、国際事業主任を指名し、新設、統合、廃止、改称を経て、現在の国際事業の枠組みに至っています。事業のグルーピングは、区、部、クラブが効率を考慮し、編成しています。それぞれの段階に独自の事業もあります。

少年事業(後にYouth Workと改称)は、少年少女の知・心・体の健全な発達のためにYMCAのプログラムをサポートする事業でした。初期においては、「Hi Yクラブ」などのクラブづくり、キャンプやYMCA施設の建設、スポーツ大会の開催、合唱団、バンドの結成を援助しています。

青年事業(後にYoung Adult Workと改称)は、18歳以上の高校を卒業した男女を対象にして、職業教育、趣味・教養のプログラムや、新婚カッ

プルのクラブなどを援助しました。

日本区では、1970年から、少年事業と青年事業を統合して、青少年事業としています。

\*世界展望は、ワイズメン各人は、互いに隣人として、関心をもち、小さなことであっても手を差しのべ合おうという事業でした。国際協会は、設立直後から、この事業を重視して、初代事業主任(1927-1929)には、初代国際会長のポール・W・アレキサンダーが就いています。日本区では1977年にYEOP事業と、IBC事業に分かれ、国際展望という事業名は消えました。

ユース事業の新たな展開

事業は、さまざまな変遷をたどっています。それぞれに、その時代における事情とワイズメンの思いがからんでいます。ここでは組織や名称の変更の変遷には触れません。現在、行われているユース事業について、その国際と日本における「事始め」を述べることにします。

ワイズメンズクラブ国際協会は、創立50周年を迎えた1972年、大きく舵を切りました。それは国際憲法の改定と国際本部事務所のジュネーブ移転でした。

その後を現象的に見るならば、ワイズ運動は、世界的に拡散し、1980年代から、女性メンバーの活躍が目立ちました。さらに、国際議会の協議の中で、ユースについて語られることが多くなってきました。それも、若者を奉仕の対象ではなく、若者を主体として、運動に迎え入れようという動きが活発化しました。それぞれに、立ち上げの物語とこだわりがあります。

## YEEP

(Youth Educational Exchange Programme)

ワイズメンの高校生の子女の交換プログラム (YEEP) が最初に行われたのは、1972 年でした。スウェーデンのレナ・ランドベリ (Lena Landberg) さんが最初の留学生でした。

これは異なる国のクラブ同士で行う事業で、留学生を送り出す側が、スポンサークラブとなり、受け入れる側がホストクラブとなって、1 年間ホームステイをして、現地の高校に通学します。

1960 年代には、すでにスウェーデン区・インゲマー・ワールストロム Ingemar Wahlstrom 区理事が、将来のワイズダムを背負う高校生のために北欧と北米のクラブ間の交換留学を行っていました。これが YEEP の土台となりました。

日本区からの初期の送り出しは、1975-1976 年の藤本聖子さん (コメット・神戸)、1976-1977 年の鈴木久美子さん (同・東京)、1977-1978 年の鈴木由香さん (同)、露崎民江さん (同) で、露崎さんは、カナダ、他の 3 人は、米国に渡りました。今日までの YEEP 留学生の中で、鈴木久美子さんは、西村隆夫国際書記長メネット、鈴木由香さんは、一時東京インターナショナル・ファミリークラブのメンバー、坂本哲朗さん (コメット・大阪土佐堀) は、大阪センテニアルクラブのメンバーとなっています。

日本区からの最初の受け入れは、1985-1986 年にカナダ・カルガリークラブのヘザー・アン・フォークナー (Heather Anne Faulkner) さん。京都ウエストクラブがホストクラブとなり、森田恵三さん宅にホームステイをして、府立洛西高校に通学しました。1987-1988 年には、スウェーデン・マルモクラブから、マデレイネ (マッデ)・フォーストローム (Madeleine Sjöström) さんが来日して、都立小石川高校に通いました。彼女の場合は、当時の北東部が受け入れた形になり、磯部成文さん (東京北)、上妻英夫さん (東京多摩)、水野鑑一郎さん (東京グリーン関係者) の 3 家庭が数カ月ごとのホストファミリーとなりました。

2 人とも、楽しい学校生活と得難い異文化経験をして帰国しました。

ヘザー・アンは、1 年後の「アジアの窓口」を標榜した福岡日本区大会で、パネラーとして、「ワイズのおかげで韓国にも訪問し、韓国の高校生の対日・対米感情の深さを知らされた。同時に、日本の高校では日韓の過去の関わりについて教えられないことが少ないと感じた。YEEP がもっと日韓や他の国に広がれば、われわれを隔てる垣根を取り去ることに貢献するだろう」と発言しました。

マッデは、帰国後もホストファミリーと連絡をとり、数年前には夫と子どもとともに来日し、懐かしい対面を果たしました。

その後の送り出し、受け入れは続きました。『日本ワイズメン運動 70 年史』(1997 年) の記録のとおりです。

しかし、東日本区になってからは、送り出し、受け入れとも 1 件もありません。

問題点はいくつかあります。

留学生の希望留学先が具体的になっている。最も人気がある米国で、受け入れ家庭が減少していること、公立高校の授業料免除がなくなったこと、入国が厳しくなったことなどが原因となっています。

現在の世界のワイズメンの数では、留学生側の希望と一致する組み合わせは、非常に困難である。

わが子でも計り知れないのに、情報の少ない高校生を長期間、預かることに抵抗がある。ホームステイの人气が双方にない。

スクールカレンダーが日本と諸外国とで違うため、1 年以上の休学扱いになってしまう。留学先が早く決まらないため、進路を決めかねる。しかも決まらないケースが多い。

申し込みから、留学・帰国まで長期になるため、通算 3 人の事業主任が担当する。

以上のようなことから、YEEP は困難になってきているようです。高校生の交換は STEP を中心として、しかも IBC 同士でとり決めて、国際は

追認する形の方が現実的のようです。また担当は、事業主任ではなく、適した人を選び、国内外に人脈を育てられるように長期間担当することが必要だとの意見があります。

## STEP

(Short Term Exchange Programme)

YEEP よりも手続きも容易な短期留学制度・STEP が、1991 年に制定されました。当初は Short-Term Youth Exchange Programme として、ワイズメンの子弟、孫で 14 歳から 25 歳が対象でしたが、1997 年に現名称に改称し、対象がワイズ子弟以外にも広がり、年齢は 15 歳から、期間は 3～12 週間になりました。

日本区時代には、受け入れ、送り出しともなく、東日本区が最初に送り出したのは、2000 年の吉田行宏さん（東京江東）、酒井美直さん（十勝・推薦）でした。受け入れは、同年、韓国から Lee Hyuk-Jae さんで、夏休みを吉田司さん（東京江東（当時））宅で過ごしました。

東日本区になってからの STEP については、『東日本区 10 年史』（2008 年）に記載されています。

## ユースコンボケーション

(International Youth Convocation: IYC)

(Area Youth Convocation: AYC)

1985 年は「国際青年年」でした。前年の 1984 年の国際議会に、モーゼス・アデサンロイ (Moses Adesunloye) アフリカ地域の会長から、これを機に若者に対して何かをすべきだとの提案が出されました。指名されたユースサービス委員会から、1985 年の年央会議 (Mid-year Meeting) に提案されたのが国際ユースコンボケーション (IYC) でした。この委員長のクレア・グラハム (Clare Graham) 直前国際会長は、名言を残しています。

「私たちの意図は、若者に奉仕することではない、若者に奉仕の手段を提供するのだ。」

1986 年のデンマーク・オーフス国際大会に合わせた集会のために指名された委員長から、明確な案が示され、実施が決まりました。参加者は 15 歳から 24 歳の若者で、150 人を集め、プログラムは 2 日間として、セミナー、討論、文化・スポーツの交流を含みました。

実は、ユースコンボケーションには先駆者がいました。ハワイ区が太平洋沿岸諸国に呼びかけた Y's Men - YMCA Pacific Convocation (太平洋集会) です。高校生とワイズメン・ファミリーが参加し、世界共通の問題や各国の抱える問題を話し合う試みでした。オアフ島のキャンプ場でのキャンプに加え、分散してのホームステイもこのイベントの重要なパートでした。第 1 回は、1977 年 8 月 21 日～29 日に行われ、日本区から、青木一芳 IBC・YEEP 事業主任 (千葉)、西和世さん (前橋) が、YMCA に所属する学生 4 人と参加しました。アタミ基金 (後の JEF) から費用の一部を支援しました。これも簡単に決まったわけではありません。当時は、YMCA のボランティアリーダーの支援は惜しまないが、子どもの遊びまでは費用を出せないという空気があったからです。

隔年開催ということで、1979 年は参加をせずに、1981 年には、谷川寛次期 IBC 事業主任 (大阪土佐堀) が、3 人のコメット、坂本真理さん (大阪土佐堀)、仁科恵里さん (名古屋)、高橋宏昭さん (大阪長野) が参加しました。1983 年に、再び青木 YEEP 事業主任と、福田梯三さん (神戸) が、今村雅子 (コメット・大阪土佐堀)、大岡今日子 (同・大阪) を伴い参加、1986 年には、富田鈺次さん (東京世田谷) が、今村純子さん (コメット・大阪土佐堀)、川久保真理さん (同)、東京 YMCA のリーダー 2 人と参加しました。

さて、オーフスの IYC は、夏休み中の地元の高校の校舎と寄宿舎を借り切って行われました。テーマは『ユース 明日への礎石』でした。YEEP 経験者を含むユース 142 人が参加、日本からの参加は、4 コメット、青木のぞみさん (コメット・千葉)、石井美喜さん (同・東京西)、川戸重幸さ

ん（同・京都ウエスト）、李承和さん（同・大阪豊中）でした。IYC でユースたちは、YEPP の重要性を主張し、YEPP 経験者をワイズに取り込むことを提言しました。今回は、1988 年に京都国際大会に併催する方向になりました。

ところが、日本区は国際大会実行委員会を含めて、ホストに消極的でした。国際大会そのもの見通しもつかず、この年の日本区大会の規模を縮小して、会場を予定していた神戸から御殿場・東山荘に変更するなど、苦労していました。また、日本では北欧と違いコミットが、組織化されていないので運営出来ないだろうということも理由でした。当時は、まだ、ユース事業は一部の人がやっているという印象もあったのです。しかし、クリア・グレハム IC 委員長の強い要望もあり、青木一芳さんが懸命に粘りました。

結局、青木さんがやるのならという感じで、大会とは切り離して、小規模として日本区が行うことになりました。このコンボケーションは、『Uniting Youth』のテーマで、海外から 29 人、国内から 45 人、スタッフを加えて 80 人の参加で、7 月 26 日～30 日、京都トラベラーズ・インで行われました。ハイライトは国際大会における、分団協議の発表『若者の明日への思い』でした。大会は成功でした。青木さんは、「谷川寛さん、長尾ひろみさん（大阪土佐堀）、菅原美穂子さん（富山）たちのサポートがあった」と語っています。日本区は、開催のために 200 万円の援助をしました。

京都が繋いだことによって、その後、ミネアポリス、オスロ、シンガポール、フレデリクトンと引き継がれていきました。

一方、アジア地域ユースコンボケーション（AYC）も、隔年で開催されるアジア地域大会と併催されてきました。今年、2011 年 8 月には台湾で開催されます。

ところが、その始まりの記録がありません。最後の日本区理事だった吉田一誠さんの報告に、1997 年に韓国ワイズメンの努力によって AYC

が濟州島で行われるとありますから、現在の形式の本格的な AYC は、これが始まりのようです。

それでも、1993 年の神戸・アジア地域大会では、青木さんや長尾亘さん（大阪土佐堀）が中心となって、韓国、中国、フィリピン、タイなどからの留学生とコミットや YMCA の若者とでユースフォーラムを行いました。そして地域大会において、「EU にならって、アジア・ユース・コミュニティをつくり、AYC を行おう」と分団協議の結果を提言しました。

また、1995 年のコロボ・アジア地域大会では、年少者のコミットプログラムがあったと記憶している人もいます。これらが前史でしょう。

東・西日本区になってからは、『東日本区 10 年の歩み』（2008 年）に記録されています。

区のロースターの広告掲載は 1999 2000 年度から始まりましたが、この収入は、ユースコンボケーションへのユース派遣の補助にも使われています。

## ユース代表

(Youth Representative : YR)

ユースをワイズダムに取り込む議論は、継続されていましたが、1993 年の国際年央会議で、シルビア・レイエス・コロチ (Silvia Reyes Croci) 拡張国際事業主任 (ウルグアイ) が、ユースをクラブ拡張の一部と見る必要があると主張し、また、リチャード・ニコルス (Richard Nicholls) ユース活動国際事業主任 (英国) から、国際議会レベルで、ユースを取り込むこと、意見に耳を傾けることの必要性が指摘され、検討の末、ユース代表の国際議会への出席を認めることになりました。代表は、18 歳～25 歳のユースで、2 年任期として隔年に開催される国際ユースコンボケーションにおいて、投票で決することにしました。

最初のユース代表は、シンガポールの IYC で選ばれた 18 歳のチーム・コイビストさん (Teemu Koivisto : フィンランド) で、1995 年と 1996 年の国際議会に列席しました。1996 年からは、ワ

イズメンの世話と教育係を付けることになりました。

日本からは、2005年と2006年、橋崎頼子さん(コメット・姫路グローバル)がユース代表となっています。

このユース代表は、地域や区レベルでも置かれるようになりました。東日本区では、2000年4月の区役員会で中田靖泰区理事(札幌)の提案によって、ユース代表の役員会陪席、旅費の支給、発言権はあるが議決権はないなどを決め、何回かの出席がありましたが、ユース側の事情もあって定着しないで立ち消えになっています。

## ユースインターン (Youth Intern)

1994年、青木一芳さんが国際会長の時、国際議会に、ドウアルチ・パチェコ(Duarte Vas Pacheco De Castro Jr.)直前国際会長(ブラジル)が、ユース・インターン(研修生)を国際本部に置くことを提案、ジュネーブの国際本部に、1名、1年任期で雇用することになりました。各地域からの推薦の推薦を受け、最終的にはカナダのライアン・メトカルフ(Ryan Metcalfe・カナダ)さんが初代インターンとなりました。彼は、1995年に着任して、ユースコンボケーションの企画、YEEPに関するデータベースの作成、『ユースワールド』の発行、TOFに関するレポートなどを作成し、国際本部スタッフを務め、2代目のロッサナ・クロチ・レイエス(Rossana Croci Reyes・ウルグアイ)さんに引き継ぎました。

日本から初めてインターンとなったのは、7代目の稲田奈々美さん(コメット・沼津)でした。2001年9月から1年間、国際議会の出席、IYCの企画などを行い、ロランド・ダルマス(Rolando Dalmas)国際書記長らスタッフから高い評価を受けました。沼津クラブには毎月、詳しい近況報告が送られ、ホームページに連載されました。「食べ物の話ばかりだけど、大丈夫なんだろうかと、出国前に青木一芳さんとともに、ワイズメンにつ

いての集中特訓を行った鈴木健次区事務所長は気をもんでいました。しかし帰国後に出版された体験記『『ユースインターン稲田奈々美のジュネーブ便り』静岡新聞社2002年』は、バランスのとれた痛快な読み物になっています。

現在(2011-2012年)は、橋崎真実さん(姫路-Y3)が第17代インターンとして活躍中です。西村国際書記長も「本当に叩き上げのユースリーダー」と頼もしがっています。

同じ年に、ルイス・グラクドー(Luis A. Gratadoux) YA 国際事業主任(ウルグアイ)が、YA(Youth Activities)をYIA(Youth Involvement and Activities)と改称するように強く求め、その後、変更となりました。この頃が、ユースに関心の集まった時期です。

## ユースクラブ (Youth Club)

『日本ワイズメン運動史 1980-1988』(1989年)の「国際の展望」の中に、「ワイズリングクラブ」「ユースクラブ」が、80年代に入って次第に世界各地に芽生えた、とありますが、日本での最初のユースクラブ誕生は、1998年まで待つことになりました。1997年、韓国済州島で行われたアジア地域ユースコンボケーション(AYC)には、日本から43人が参加しました。盛り沢山のプログラムが用意されたため、話し合いに時間をとれなかったこと、与えられたテーマが、出来合いの『YEEPとSTEP』だったことに彼らは反発しました。英語が共通語とならず、それぞれの国ごとの分団で母国語で協議し、代表が全体会議で報告する方法がとられました。日本のユースは、2日目の夜から、「これからのユース活動をどうするか」というテーマで、議論をし、1999年日本で開催されるAYCを、自分たちで、企画・実行することに決めました。ワイズ側の担当者も、ツアーを中止して、協議をさせてくれました。

帰国後、東西でユースクラブづくりが始まり、東日本区には、Y3-E、西日本区にはY3-Wが誕

生しました。Y3とは、YMCA、Y's、Youthを、EとWは、東西を意味します。Y3-Eはコースコンボケーション経験者とワイズコメットが中心となり、1998年6月の第1回東日本区大会の中でクラブ設立宣言をし、クラブとして活動をはじめました。1999年に北海道十勝で行われたアジア地域大会におけるAYCでは、Y3-Eを中心としたコースと地元十勝のコースによって、企画・運営され、異例の盛り上がりを見せました。

Y3-Eは、大会後は、東京YMCA山手センターを拠点に集い、YMCAやワイズに関わりのなかった新しい仲間を加え、河川清掃、アルミ缶のブルタブ回収などの活動を行うとともに、東日本区役員会、コース委員会に陪席しました。

ワイズメン有志やYMCA同盟スタッフも助言をしました。しかし、次第に活動は停滞していきました。ワイズメン側は、どうしても定例会を軸としたクラブ活動を求めます。しかし若者は、年齢の幅が広く、進学、就職、転勤と移動の激しい時期で、地域的にまとまっているわけでもないため、定期的集まることも難しい状態でした。設立時のメンバーが変わると、新しいメンバーも加えられなくなり、世代が進まなくなっていました。2007年6月に活動を閉じました。

しかし、一粒の種が地に落ちて、やがて各地にクラブが生まれ出しました。2003年に宇都宮で行われた東日本区大会で、「Y3宇都宮」が設立宣言をしました。もともと宇都宮ではワイズメンとコースとの交流や共同のワークがありました。

2005年には東京クラブが支援して「東京ワイズユースの会」が発足しました。

2007年1月、「ワイズユースクラブ横浜-Y3」が国際協会加盟認証状伝達式を横浜YMCAで行いました。国際がユースクラブの設立を積極的に奨励していました。第1号の認定でした。同じ年の3月、「ワイズユースクラブ姫路-Y3」が認証され、「東京ワイズユースの会」も2008年6月、「ワイズユースクラブ東京-Y3」と改称し、ユースクラブとして認証されました。

ユースクラブの設立には国際ユース代表だった橋崎頼子さん(コメット・姫路グローバル)が作成して、韓国・プサン国際議会で承認されたユースクラブ国際加盟の手引きと申請書が用いられました。彼女は、現ユースインターンの橋崎真実さんの姉、1996-1997年のYEEP留学生でした。ユースクラブからワイズメンになったのは大槻展子さん(東京)が最初で、その後も続きそうです。

### ユースボランティアリーダーズ・フォーラム (Youth Volunteer Leader's Forum: YVLF)

YVLFは、東日本区にあるYMCAの主に学生のボランティアリーダーの研修と交流のフォーラムです。東日本区の援助で、比較的経験の浅いリーダーが、2泊3日、寝食を共にし、かけがえのない時を過ごします。

このフォーラムは、日本区時代の1987年の東部、北東部、南東部の3部合同部会に始まります。

東部部長の島田克朗さん(千葉)が、同クラブの倉石昇さんと関係のある外洋船・にっぽん丸の帰港に合わせて、船上部会をすることを思いつきました。しかし、東部だけでは貸切りにできないため、北東部部長・服部幸一さん(東京グリーン)、南東部部長・福島正さん(東京目黒)に声をかけ、両部長も賛成しました。この年度は、鈴木功男区理事(東京)が、「青年と共に働くワイズ」をテーマに掲げ、「われわれの関心のどまん中に青年を置きたい」と訴えたこともあって、YMCAのユースリーダーを夕食会に招待しようという話になりました。

3部のクラブが関係するYMCAのワイズ担当主事会でリーダートレーニングが企画されました。たまたま、東京YMCAから千葉YMCAの総主事に就任したばかりの本行輝雄主事が中心となり、短期間に話がまとまりました。

リーダーたちは、アジア青少年センターに雑魚寝で1泊して研修し、2日に、東京晴海埠頭に錨泊中のにっぽん丸のデッキで、ワイズメンの夕食

会に合流しました。

各 YMCA の垣根を超えての研修は、リーダーたちに喜ばれ、これをフォーラムとして毎年、行うようになったのです。これは、YMCA 同盟の3カ年計画がこの年から始まり、そのなかにワイズメンズクラブとの協力が含まれていたことも幸いしました。参加する部も東日本区全体に広がり、2005年に区（ユース事業委員会）が所管するようになりました。

研修は、2泊3日、YMCA スタッフの企画・運営のもとに行われ、近年、プログラムの中にワイズメンが実社会の経験などを語る時間がとられています。

### ワイズメン途上の死

あまりに早すぎるユース・吉田行宏さんの死でした。私は、1月12日、区事務所で悲報を知りました。鈴木健次所長が無言で、プリンターが打ち出した国際本部の西村隆夫さんからのメールを差し出しました。デトロイトで29歳。そんなことがあるわけではない、なぜジュネーブからなのか。後から聞きましたら、現地で、このことを知った行宏さんの友人が、フェイスブックで流したのです。西村さんが事実を確認してから、区事務所に一報を入れたのです。事務所には、その前にユース事業委員長である母・吉田紘子さん（東京銀座）からメールが入っていました。「急用でアメリカに行きます。しばらくY'sは休むことになります」。

当然、現地から吉田家に電話が入り、父・吉田司さん（東京むかで）が受けたそうです。次に事務所に届いた夫妻からのメールは事態を報告し、結びにこうありました。「ご心配いただきありがとうございます。8月の国際大会で活躍してくれたことが、彼を育ててくださったYMCA/ワイズメンへの恩返しだったのでしょうか。いろいろありがとうございました」。

1月16日、ミシガン州ノバイで告別式、29日に東京YMCA東陽町センターで「送る会」がも

たれました。

聞けば、国際本部のユースインターン、橋崎真実さんが、11月に米国に行くことになった時、西村国際書記長が、ユースが活躍している米国YMCAの事情を聴くためにシカゴYMCAに行くことを勧めました。真美さんは、米国にいる行宏さんに連絡をして、二人で、YMCAを訪ねました。シカゴYMCAのスタッフは親切に米国の状況を説明してくれたそうです。

深い悲しみの中にある方、そして、尽きない思い出を語りたいた方が大勢いらっしゃいます。私だけが、ここで長く語ることは許されないと思います。ひとつだけ、思い出を書きます。

8年前、あずさ部の1泊部会が、山中湖キャンプサイトで開かれました。毎年、このキャンプ場でワークキャンプをやっている東京サンライズクラブがホストでしたから、キャンプサイトに散歩道を作ろうというプログラムがありました。

全員が集まりましたが、どうやって始めるか分からず、手をつけかねていました。

そこに、大学生だった行宏さんが現れ、「ちょっと僕にやらせてください」と言って、見る間に低木の枝を払い、スコップで道を拓きました。意味と要領を飲み込んだワイズメンも加わり、道をならし、草を抜いて、気持ちの良い小径ができました。彼の力強く、巧みなスコップさばきが、まだ脳裏にあります。

シカゴYMCAで、米国のユースの活躍を聞いて、幼稚園からYMCAで育ち、STEPと、前後5回のユースコンボケーションにも参加している行宏さんは何を感じたのでしょうか。

西村隆夫さんも、横浜のIYCで指導した林茂博さん（横浜つづき）も、「彼ならばアメリカのユースの活躍を、日本のYMCAとワイズメンズクラブに持ち込もうと、3者のコラボを見据えていたに違いない」と言っています。

吉田行宏さんの、ワイズメン途上での思いを継いでくれる若者が現れることを期待します。